妊婦貧血の胎児におよぼす影響についての臨床的及び疫学的研究

（分科会総括研究報告書）

愛育病院院長　産婦人科
松　山　栄　吉

分担研究課題

Ⅰ　妊婦の貧血と新生児の血液障に関する研究
分担研究者(班員)：　古谷　　博・順天堂大学医学部産婦人科教授

Ⅱ　妊婦の貧血と妊娠中毒症に関する研究
分担研究者(班員)：　清水　哲也・旭川医科大学産婦人科教授
研究協力者：　永井　生司・横須賀共済病院産婦人科部長

Ⅲ　妊婦の貧血と胎児・母体に及ぼす影響に関する研究
分担研究者(班員)：　藤井　　仁・愛育病院産婦人科部長
研究協力者：　有広　忠雅・東京慈恵会医科大学青戸分院産婦人科助教授
〃　：　河上　征治・慶応義塾大学医学部産婦人科講師
〃　：　白川　光一・福岡大学医学部産婦人科教授

Ⅳ　妊婦の貧血と周産期障害に関する研究
分担研究者(班員)：　藤森　　博・国立岡山病院産婦人科部長
研究協力者：　関場　　香・岡山大学医学部産婦人科教授
〃　：　高知　床志・岡山市民病院名誉院長，産婦人科

1. 研究目的

妊婦の貧血の母体あるいは胎児に及ぼす影響については，従来いろいろの研究が報告されてきた。しかし疫学的に解明された部分はほとんどなく，とくに胎児の奇形発生，新生児の血液障害，あるいは将来の小児の発育過程に及ぼす影響については，不明の点が多い。

また従来妊婦の貧血について設けられたWHOの基準が，医学が進歩し妊婦管理が充実してきた現在においてもそのまま適用しうるかどうか，あるいは新しい基準を設ける必要があるとすればどのような値か，再検討する必要がある。

2. 研究方法

昭和52年度から始まった本研究は，第1年目には従来の妊婦の貧血の定義に基づいて，パイロットスタディーとしての研究を行った。その結果新しい基準として，妊娠前半期と同後半期の貧血群とに分け，さらに貧血をいくつかの段階に分けて，第2年目の研究を行った。

なおこの研究を進めるために，昭和53年7月1日，東京ステーションホテルにて本年度第1回の打ち合わせ会(分科会)を行い，昭和54年3月5日に研究結果を報告する第2回分科会を開催した。

3. 研究結果

(1) 古谷　博

妊婦貧血の実情について，関連病院を含め2,300名についての調査を行い，妊婦の年齢や経産の有無，身長などについて分析を行った。また母体および臍帯の血清フェリチン値について検索を行い，その関連性について調べた。

(2) 清水　哲也

北海道地区における6施設，2,714例について，妊婦の貧血の程度と妊婦中毒症の重症度との関連性について分析を行った。しかしその結果統計上有意の相関は認められなかった。

(3) 永井　生司

貧血のある妊婦の血液所見を分析し，それと妊婦中毒症の関連性について調べたが，貧血妊婦に妊娠中毒症が多発すること，また妊娠中毒症例に貧血が多いという所見は得られなかった。妊婦の貧血が低蛋白血症や低血清鉄を現すことは，蛋白や鉄の胎児への供給が優先していることを示している。

(4) 藤井　仁

妊婦の貧血が妊娠，分娩に及ぼす影響について，貧血の発現の時期，経産の有無，妊娠中毒症，胎児体重，分娩時間，分娩時出血量などとの関連性について分析した。妊婦の貧血はすでに妊娠前半期から現れること，貧血群に浮腫の発現頻度が多いことなどを認めた。

(5) 河上　征治

妊娠・分娩・産褥過程の妊産婦の貧血と，産褥初発排卵との関係について，基礎体温を計則した118例について分析した。その結果貧血群は対照に比し，初発排卵が平均約40日遅延することを認めた。

(6) 有広　忠雅

妊婦の貧血が胎盤の形態にいかなる影響を及ぼし，それが胎児にどう影響するかについて，488例について検索を行った。胎盤の組織所見についても，電顕所見を含み研究した。その結果貧血が高度になると胎盤組織の線維化が起こる所見を認めた。

(7) 白川　光一

特殊血液疾患を有する妊婦について，自己免疫性溶血性貧血の1例と，再生不良性貧血の1例とについて，胎児の所見との検討を行った。

(8) 藤森　博

最近の女性(非妊婦)1,144例について，貧血の状態の調査を行った結果，25.5％に貧血を認めた。また妊婦の貧血について，妊娠中毒症，早産，SFD，産褥合併症などにつき，関連性について分析したが，あまり顕著な有意差は認められなかった。なお母体の貧血と臍帯血所見との関連性についても分析した。

(9) 関場　香

実験的にラットに鉄欠乏妊娠の状態にし，その胎仔への影響について調べた。その結果鉄は胎仔に優先的に取り込まれるが，子宮内での発育は障害され，母体よりも胎仔に影響の大きいことがわかった。

(10) 高知　床志

妊娠初期から定期検診を行い，貧血と判定した144例について，対照との間に，分娩時出血，鉄剤投与の実態，アプガー指数，SFDなどに差異があるか否かの分析を行った。また妊婦の貧血と臍帯血，小児期の血液所見の関連性をみた。そして小児の貯蔵鉄の状態について検索した。

4. 考察ならびに要約

妊婦の貧血の実情と，その胎児・新生児に及ぼす影響をみるために，いろいろな面から分析を行った。母体の鉄は優先的に胎児に取り込まれるが，妊婦の貧血がよく管理・治療されるようになった現在において，以前みられたような障害は母児ともに著しく減少していることがわかる。これらの結果に基づいて，第3年目に総体的な疫学調査を行い，結論をまとめたい。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.研究目的

妊婦の貧血の母体あるいは胎児に及ぼす影響については,従来いろいろの研究が報告されてきた。しかし疫学的に解明された部分はほとんどなく,とくに胎児の奇形発生,新生児の血液障害,あるいは将来の小児の発育過程に及ぼす影響については,不明の点が多い。

また従来妊婦の貧血について設けられた WHO の基準が,医学が進歩し妊婦管理が充実してきた現在においてもそのまま適用しうるかどうか,あるいは新しい基準を設ける必要があるとすればどのような値か,再検討する必要がある。